

般社会の同情を得て、そして最後に政府者側の干渉をして労働者の利益に終らしめんとするよ
うなストライキではない。維持金も何もなしに、短かい時間の間に、労働者のエナジーをエ
キステンシフでなくインテンシフに集中した、本当に労働者が重大な決心を要する、正気の狂
人的ストライキだ。労働者のエナジーと自信と個人的勇氣と発意心とを、その最高潮に到ら
しめるストライキだ。

もしすべての労働者が、かくのごとき極力的戦闘をすることを拒み、またかくのごとき生の
最高の山頂に攀登ることを拒むならば、労働者は永遠の奴隷である。

生の最高潮に上りつめた瞬間のわれわれは価値の創造者である、一種の超人である。僕はこ
の超人の気持が味わいたいのだ。そして自らこの瞬間的超人を経験する度数の重なるに従っ
て、一步一步、この種の真の超人となる資格が得たいのだ。

賭博本能論

僕等の『平民新聞』創刊の計画について、ある深切な二、三の友人は、僕等に忠告して言
う。かの大逆事件以来、歴代の政府の方針は、いっさいの無政府主義のおよび社会主義的言論
を、絶対に禁止するということにあるらしい。大隈内閣が言論の尊重を宣言したといっても、勿
論それは、君等には適用される筈がない。現に『新仏教』五月号は、堺君の「平民読本」のた
めに発売禁止の厄に遭い、また日本労働党の発行した「労働者諸君に与う」と題するチラシも
差押えを食っている。君等の新雑誌は、あるいは創刊勿々この手を食って、おまけに君等二人
も、すぐさまぶちこまれるようなことになりはしまいか。いや、あるいは政府では、手ぐすね
引いて、十月の来るのを待ち構えているのかも知れぬ。そうなると、まるで君等は、政府のわ
なの中へ、わざわざ飛びこんで行くような愚に陥いる。それよりはやはり、もうしばらく忍ん
で、今のままの『近代思想』に拠って、例の哲学とか科学とか文学とかいう安全な保護色の下

に、君等の主義の漠然とした伝道に従つたらどうだろう。それに、君等は知識的手淫など言つて妙にけなしてもいるが、その手淫のとばかりで立派に妊んだものも、ずいぶんあちこちにいるんだ。

そこで僕はこの深切な友人等に答えた。

僕等はもうそのいわゆる安全に飽き飽きしたのだ。というよりはむしろ、この安全が、かえつて、僕等の生を萎縮さすように感じたのだ。そして今度は君の言うその危険の中へ、わなの中へ、わざわざ飛びこんで行つて見たくなくなったのだ。僕等の本能と僕等の理知とが結び付いて、どうしてもそこへ飛びこんで行かねばならぬ力を、僕等の中に生じさせたのだ。

そして僕は、その友人に説いた。

アナトール・フランスの著『エビキュルの園』の中に、賭博うちの心理についての、興味深い二つの小話がある。

その話の一つはこうだ。

賭博気遣いにとりつかれた二人の船頭があつた。それが難船に遭つて、恐ろしい出来事の後、鯨の背中に乗つかつてようやく死を免れた。すると二人は、そこへ乗つかるや否や、ポケットから骰子と骰子振りとを取出して、賭博をうち始めた。

もう一つの話はこうだ。

神様が、ある子供に、糸捲を与えた。そして神様は言う。「この糸はお前の生涯の糸だ。これを上げるから持つておいで。そしてお前の月日を経たそうと思つたら、この糸を引けばいいんだ。お前がこの糸を急いでほごすか、ゆっくりほごすかによつて、お前の生涯は、早くも遅くも過ぎて行く。またお前がこの糸に触らないでいれば、お前は、いつまでもお前の生涯の同じ月日にとどまっている。」子供はその糸捲をもらった。そしてその糸を引っぱった。まず大人になろうと思つて、次にその愛する許嫁と一緒になろうと思つて、次に二人の間にできた子供の大きくなるのを見ようと思つて、職業にありつき、金儲けをし、名誉を得ようと思つて、いろいろな心配を遁れ、年とともに来る悲しみや病を避け、そしてついに煩わしい老を終ろうと思つて。こうして彼は、この神様に会つてから、四カ月と六日で死んでしまった。

ほんとうに、アナトール・フランスの言うように、賭博とは、運命が普通には長時間、また長年月の間でなければ生ぜしめない変化を、一秒時の間にもたらしめる、術なのだ。他の人の緩やかな生涯の間に散在しているあらゆる情緒を、ただいっときの中に集中さす術なのだ。数分時の中に、一生涯を生きる秘訣なのだ。金を賭ける。金とはすなわち、直後の、無限の可能性をもつたものだ。ひっくり返す一枚のカルタの中には、飛んで行く小さな球の中には、あらゆる地上の富貴や、栄華や、権力やの可能性が含まれているのだ。そればかりではな

い。なおその中には、それらのものの夢が、含まれているのだ。しかしこの賭博にはまた、恐ろしいダイヤモンドの爪がある。勝手に窮迫を与える。恥辱を与える。そしてこの故に、賭博が崇められるのだ。あらゆる大情欲の底には、危険という引力がある。逆上のない逸楽はない。恐怖のまじった逸楽は狂熱を導く。かくのごとき逸楽の中には、剛胆者の全筋肉をふるい立たしめる、あるものがあるのだ。

僕は、この賭博の心理を、冒険の心理を、人間の本能の中に見た。動物の本能の中に見た。原始人類はあらゆる危険の裡に生活していた。さればこの危険を冒すという自然の傾向が、今日なお、すべての人々の中に、多少の程度において、見出すことができる。今日、多くの遊戯が、一種の危険の真似事であるがごとくに、危険は、原始人類のいわば遊戯であったのだ。そしてこの危険のために危険を冒すという、危険の興味は、動物の中にも見出すことができる。ムウホの『シャムおよびカンボジャ旅行記』の中に、これについての面白い話がある。

一疋の鰐がからだを水中に埋めて、大きな口をあけて、そのあたりを過ぎる餌食をつかまえるようにしている。それを一とむれの猿が見つけて、しばらく何か協議していたようであったが、やがてだんだんと鰐のそばへ近づいて行って、かわるがわる役者になったり見物になったりして、その遊戯を始めた。一番はしっこそうな、一番大胆らしい奴が、枝から枝を伝って、

鰐のとどきそうなどころまで行って、手足で枝にぶら下って、そしてそのお得意のはしっこさで、からだを前へやったり後へひっこめたりして、時としては手を延ばして鰐の頭を打ち、時としてはただ打つまねをしている。

ほかの奴等も、この遊びを面白がって、その仲間入りをしようとしたが、ほかの枝があまり高すぎるので、大勢で手足でつかまり合って、一連の鎖をつくって、そしてぶら下って、鰐に一番近い奴が、ありたけのわざを尽して、鰐をからかう。時々あの恐ろしい顎が閉じる。けれども大胆な猿は容易につかまらない。すると猿どもは躍り上って歓呼する。しかし時には、この軽業師も、螺旋盤のような大きな顎の中に手足をはさまれて、瞬く間に水の中へ引きこまれてしまう。さすがの猿どもも、恐れ慄いて、泣き叫びながら、散り散りに遁げて行く。しかしこれにも懲りずに、数日後、もしくは数時間の後には、また同じこの遊戯をやり集まって来る。

僕は、僕の論旨を進める便宜として、この三つの話を挙げた。しかし僕とても、かの船頭や、子供や、または猿のごとく、ただこの強烈な賭博本能に駆られて、危険の中へはいって行きたいというのではない。鰐の口もとへ行って、うまくその頭を叩いてやろうという、遊びのための遊びに耽ろうというのではない。先きにも言ったごとく、僕のこの賭博本能は、この一種の生活本能は、さらに知識本能によって、訓練された力になっている。ただ僕は、これらの

話に因って、賭博本能すなわち冒険本能が、その生地のまま進んで行く時、いかに極端に走った、馬鹿げた狂熱的の力を持っているかを示せば足りるのだ。

この危険の快楽は、常にそしてことに、勝利の快楽を得たいためから起る。

ただ猛獣狩をするためにアフリカの奥地深くは行って行ったイギリスのバルドウィンは、危うく獅子に打倒されようとした後に、何故人間は、何の利益もないこんなことにまでその生命を賭けるのか、という問題に対して自ら答えている。「これは私の解決しようとする問題ではない。ただ私の言い得るすべては、よし賞讃してくれる何人のいない時でも、あらゆる危険を冒して行く苦痛に価する内的満足、勝利の中に見出すということである。」人間には、何ものにも、動物にでも、勝ちたい、自己の優越を証拠立てたいという、自尊の本能がある。そしてこの本能は、勝利の希望のなくなった後にでも、なおわれわれをして、頑固に、決死の戦を続けしめることがある。

この闘争本能は、戦争や狩猟におけるごとき人間または動物に対する闘争、海や山やまたは空中におけるごとき目に見える自然物に対する闘争、その他あらゆる種類の困難におけるごとき目に見えない障害物に対する闘争、というようにその闘争形式は変わって行く。しかし闘争本能そのものはついに消滅することがない。そしてその闘争は、常に、狂熱的決闘ともいう

べき同一の特性を保存する。すなわちその闘争が、物的領域から知的領域へ移って行っても、その熱と幻惑とはいささかも失われぬ。なおこの闘争は、さらに進んで、まったく道徳的の領域にまで移って行く。すなわち情欲に対する意志の内的闘争がある。そしてその勝利は無限の歓喜を生ぜしめる。

要するに、人間には、自らの偉大を感じなければならぬ、したがって自らの意志の崇高を自覚しなければならぬ、という本来の欲望があるのだ。この自覚は闘争によって、自己の欲望に對するおよび物的または知的障害物に對する闘争によって、初めて獲得される。

そしてこの闘争は、理性の満足を得んがために、常に何等かの目的をもたなければならぬ。人間は、かの鱉をからかって遊ぶカンボジャの猿や、または単に狩猟のためにアフリカの蛮地を探険するバルドウィンやの行為を、そのままに是認するには、あまりに合理的である。冒険の狂熱は、われわれの誰にも、もっとも臆病なるものにも、時として存在する。しかしこの冒険本能は常に合理的に働かせられることを要求する。かくしてこの危険と闘争との欲望は、理性によって指導せられることによって、しかもこの本能が一定の方向をもたないという稀れなる本能の一であるだけ、それだけ道徳上の重要性を帯びて来る。

快楽を求めて苦痛を避けることは、いうまでもなく人間の一本能である。しかしとかくに人

間は、他の大なる苦痛には眼をつぶって、ある小なる快楽を甘んじかつそれに執着する怠惰性、臆病性をもっている。けれどもこれと反対に、もっともこの反対というのはほんの皮相の観ではあるが、苦痛を通じてさらに快楽を求めることもまた、同じく人間の本能である。この本能が理性の洗礼を受けない時、いかにそれが馬鹿馬鹿しき賭博性に陥いるかは、先きに言った。そしてこの表面上二つの本能が生というメタルの裏表になって、人間の生活本能を形づくる。

科学は、この前者の本能を満足すべく、理知によって造られた。理性は科学の教える正確の領域において、できるだけ苦痛を避けて快楽を求めねばならぬ。また科学のいわゆる正確領域をますます拡大することに努めねばならぬ。しかし科学の領域ははなはだ狭い。われわれの生活本能はどうしてこの科学だけで満足はできない。そこで臆断をやる、哲学をやる。かつかの科学そのものにすら、その根底において、必ず何等かの仮定がある。かくしてわれわれは、この後者の本能に押されて、未知の世界にはいって行く。

今僕は、個人対社会の関係において、すなわち社会に対する個人の態度の問題において、この二つの本能がいかに働くべきかを説いて、僕のこの議論の結論をつけようと思う。

個性の発達をまったく無視し、かつあらゆる手段をもってそれを抑圧する、今日の社会制度の下にあっては、真の個人的行動は、そのほとんどいたるところにおいて、常に困難と苦痛と

危険とに遭わなければならぬ。そしてかの第一本能は、われわれに妥協を命じ、屈辱を強いる。われわれをして、ただ生きて行くというだけの、生の安全を保たせる。そしてわれわれには、このただ生きて行くというだけの生に対しても、なお猛烈な執着すなわち自己保存本能がある。

けれどもわれわれはまた、こういった無為の生活に堪えられるものではない。いささかなりとも自己超越本能を満足せずに生きていられるものでない。そこでわれわれの対社会的態度は、常に隙を窺っては冒險的方面に出ようとす。一歩でもいい、ただ生きて行くという生活から超越したい。一刻一刻に現在の自己を超越して行きたい。この種の冒險は、十分道徳的に構成せられた個人の、健全なる正則の行為である。そこに、われわれの生の、真の成長、真の創造がある。そしてもしもまったくそのすぎがないと見た時、この自己超越の本能は、ついに自己保存の本能に打克って、時として自己犠牲の行為にまで進む。この場合の自己犠牲は、もはや、自己の生の単純なる否定ではない。かえって自己の生の崇高なる肯定であるとともに、またその裏り多き拡大の予想である。

秩序紊乱

僕等は、すでに幾度か、いわゆる「秩序」を「紊乱」した。また幾度かいわゆる「朝憲」を「紊乱」した。そして今また、本紙（編者註・「平」）の第一号によっていわゆる「安寧秩序」を「紊乱」した。

「秩序」とは何ぞや。またその「紊乱」とは何ぞや。僕等はただ、僕等自身の苦き生活の経験によって、その真実を知る。

人類の多数が、少数怠惰者の飽くなき貪婪と驕慢と痴情とを満足せしめんがために、刻苦して労働する。これすなわち「秩序」である。

人類の多数が、物質的生活と精神的生活との合理的発達に必要なあらゆる条件を奪われ、科学的研究や芸術的創造によって得られた享樂を夢にだも知らざる、その日稼ぎの駄獣的生活に墮す。これすなわち「秩序」である。

人類の多数が、あらゆる奢侈品や必要品の堆く積みこまれたる倉庫の前に、あるいは餓死せんとし、あるいは凍死せんとする。これすなわち「秩序」である。

人類の多数が、男は機械のごとく働き、女は大道に淫をひさぎ、子は栄養不良のために斃る。これすなわち「秩序」である。

雇主の貪欲なる怠慢のために、あるいは機械の破裂や、あるいはガスの爆発や、あるいはまた土崩れや岩崩れの下に、毎年数千数万の生命を失う。これすなわち「秩序」である。

人と人との、国と国との、絶えざる戦争、海に、山に、空に、轟く銃砲。田園の荒廢。幾世紀かの間の幾多の膏血の累積より成る富の破壊。数万、数十万、もしくは数百万の若き生命の犠牲。これすなわち「秩序」である。

しかしついに、鉄と鞭とによって維持さるる、動機と感情と思想と行為との束縛。したがってその屈従。これすなわち「秩序」である。

しからば、この「秩序」の「紊乱」とは何ぞや。

あらゆる鉄鎖と障碍物とを破壊しつつ、さらによき現在と将来とを獲得せんがために、この堪うべからざる「秩序」に叛逆する。これすなわち「秩序」の「紊乱」である。

過去一切の祝聖されたる価値の顛覆。新しき思想と新しき事実との大胆なる創造。これすなわち「秩序」の「紊乱」である。

かの「秩序」のためにほとんど死せんとしあるいはほとんど死すべかりし生命を、この新しき思想と事実とに献げて、まさに来たらんとする社会的大革命への道を拓く。これすなわち「秩序」の「紊乱」である。

真に自己のためなると同時に、また他の同類のためなる、もっとも美わしき激情の爆發。もっとも大いなる献身。もっとも崇高なる人類愛の発現。これすなわち「秩序」の「紊乱」である。

ああ、僕等はずいに、生涯を通じてこの「秩序」の下に蠢動しつつ、その「紊乱」に従わなければならぬ。「秩序」は僕等の真の死であり、その「紊乱」は僕等の真の生である。

野蛮人

「戦争に強い奴は野蛮人だ。」

戦争嫌いの僕等はよくこう言っていて日本人を嘲る。けれども僕は、この戦争に強い日本人の大部分が労働者であることを思う時、一方にこの野蛮人を悲しむとともに、他方にまた、この野蛮人に多大の望みを囁せざるを得ない。

国家のためということが、よしそれ自体において虚偽であるにせよまた真実であるにせよ、ともかくもこの思想と感情とによって行動する以上は、しかも国家の危急存亡に際しては、真に野蛮人の勇気をもってその敵に突進せねばならぬ。僕等に決してこの勇気そのものを嘲ることはできない。

国家は、国家自身の利益のために、労働者のこの勇気を、常に煽動する。しかし国家は、労働者が自己の利益のために自己の思想と自己の感情とによってこの勇気を現すことを、常に障

擬する。教育は、あらゆる方面に階級制度を認めて、上長者には羊のごとく柔順なれと教える。宗教はあきらめを説く。そして警察と裁判とは、この勇気を敢行するものを、容赦なく牢獄に投ずる。

この事實は、国家の要求するところと、国民の大多数たる労働者の要求するところと、その根底において相背反することを明示するものである。したがってまた、今日の国家組織そのものの中に根本的矛盾の存在することを明示するものである。そしてこの矛盾をあくまでも押し通そうとするのが、またそれを巧みに蔽い隠そうとするのが、いわゆる政治の根本義である。政治がこの前者に重きを置く時、多くはその国家の勃興期であり、後者に重きを置く時、多くはその衰亡期である。

さらに語を換えて言えば、国家は野蛮人の勇気によって建設され、またそれによって発達され、そしてついにそれを失うことによって滅亡に近づく。近世国家は新興階級なる紳士閥の野蛮人的勇気が、久しく秦平に馴れた封建政府の懦弱に打勝った結果、建設された。そして近世国家は、少なくともその勃興時代には、それ自体の中に含む矛盾を意に介することなく、常に野蛮人的勇気をもってその内敵に当った。内敵とは、すなわち近世国家における新興階級たる、平民もしくは労働者階級これである。しかしこの近世国家も、創業の時を隔つるに従って、漸次にその野蛮人的勇気を失って来た。そしてその最初の兆候は、かのいわゆる社会政策

の採用であった。

社会政策とは、国家が抽象的の教育や宗教によって自己の矛盾を蔽い尽すことができなくなつて、さらに新しく発明した具体的の偽瞞策である。しかしそれが単なる偽瞞策である間は、なお国家の隆盛を望み得よう。けれどもこの政策はすぐに讓歩に陥ってしまう。讓歩は墮落である。そしてこの墮落は、近世国家の主人たる紳士閥が、その内敵に対する野蛮人的勇気を失つたことを意味する。

日本の労働者は、国家のためにその国家の外敵と戦う時、常に目覚ましき野蛮人的勇気を發揮する。彼等の多くに取っては、国家のためということが、まだその思想と感情とを支配する「眞実」であるからである。したがって彼等はまた、その野蛮人的勇気を、彼等の眞の敵に対して發揮することを知らない。彼等はその眞の敵の所在をすらも知らない。しかるに彼等の敵は、その野蛮人的勇気を労働者に揮うのに、今なおほとんど何等の容赦もない。

しかしいつまでこれが続くことであらうか。

新事実の獲得

90

僕は、僕自身の中に、および僕の社会的周囲の中に、何等かの新事実を獲得することをもって、僕の最大の享樂とする。

僕はまず、僕自身の生活を障礙するいっさいのものを、僕自身の中に、および僕の社会的周囲の中に、極力破壊せねばならぬ。

僕の生活の経験は、そして僕の社会学的知識は、これら障礙の大部分が、現在の社会組織に起因することを教える。そしてその僕自身の中にあるものも、大部分はこの社会組織の反影に過ぎないことを教える。

利害関係のまったく相反する雇主と雇人。主人と奴隸。征服者と被征服者。

僕の社会的周囲は、この組織を維持せんとする暴力と欺瞞とに拠るあらゆる制度の鎖をもって、僕の生活を障礙している。そして僕自身の中にも、また僕の生活を障礙するあらゆる種類の服従道德が、この制度によって僕の骨髓にまで刻み込まれている。

かくしてその起原を同じうする内外の障礙のために、僕はほとんど僕自身を生活していな

い。
そこで僕が僕自身を生活せんと欲すれば、僕はまずこの社会組織の主人のために存在することを、断じて僕自身に禁ぜねばならぬ。少なくともこの社会組織の反影たる諸思想と諸感情とを、僕自身の中に絶滅せねばならぬ。そして久しく抑圧されていた僕の生活本能の渴望を、僕自身の中に自由に湧躍せしめねばならぬ。

この本能の湧躍は、真に僕自身を生活せしむべき、新しき諸思想と諸感情との尽きざる源泉である。

けれども僕は、さらにこの新思想と新感情とを僕の行為の上に具体化せしめねばならぬ。そしてこの具体化は、初めて僕をして全人的に新事実を獲得せしめるとともに、僕の眞の生活とかの社会組織とを闘争に入らしめる。すなわちこの新事実の獲得の中に、僕は僕のい、わゆる「生の闘争」の序幕を見る。

僕はこの新事実の獲得のはなはだ容易ならざることを知っている。かつきわめて低度のそして少数の新事実の外は、とうてい僕一個の力によって獲得され得ないことを知っている。換言すれば僕一個の力による獲得は、ほとんどただ、今日の社会組織のすでに自ずから頽敗した、もしくは頽敗の途にある、一隅のみ求められるに過ぎない。

僕はさらに進んで、僕の獲得事実を一層高度にかつ多数にするために、なお僕の同類と結合せねばならぬ。

社会組織が僕の生活を障礙するとは、同時にまた、僕の多くの同類にも同様であることを意味する。すなわちこの組織によって利用されるすべてのものは、そして利用されることの多いほど、それだけその生活を障礙される。かつ利用されることのもっとも多いものは、社会組織の根本ともっとも直接に対面している。

彼等にしてもし目覚めれば、彼等は一挙にして敵の本壘を略取することができる。僕が社会の最下級者に結付こうとするゆえんは主としてここにある。

かくして僕は、僕と利害を同じうしかつ僕と思想や感情において類縁のある、彼等の中の少数自覚者とともに、敵の死命を僕等の掌中に握るべく、さらに僕等自身の中におよび僕等の間

に、新しき生活事実を、新社会の萌芽を、歩一歩獲得して行かねばならぬ。

かくして僕等の「生の闘争」はますますその崇高を加えつつ、幕を追うて進んで行く。そして僕等の各々は、この人生悲劇において、同時に作者であり、舞台監督であり、役者であり、かつ見物人であることによって、僕等の絶大なる全人的享楽を全うする。

自我の棄脱

94

兵隊のあとについて歩いて行く。ひとりでに足並が兵隊のそれと揃う。

兵隊の足並は、もとよりそれ自身無意識的なのであるが、われわれの足並をそれと揃わずうに強制する。それに逆らうにはほとんど不断の努力を要する。しかもこの努力がやがては馬鹿馬鹿しい無駄骨折りのように思えて来る。そしてついにわれわれは、強制された足並を、自分の本来の足並だと思ふようになる。

われわれが自分の自我——自分の思想、感情、もしくは本能——だと思っている大部分は、実に飛んでもない他人の自我である。他人が無意識的にもしくは意識的に、われわれの上に強制した他人の自我である。

百合の皮をむく。むいてもむいても皮がある。ついに最後の皮をむくと百合そのものは何にもなくなる。

われわれもまた、われわれの自我の皮を、棄脱して行かなくてはならぬ。ついにわれわれの自我そのものの何にもなくなるまで、その皮を一枚一枚棄脱して行かなくてはならぬ。このゼロに達した時に、そしてそこからさらに新しく出発した時に、初めてわれわれの自我は、皮でない実ばかりの本当の生長を遂げて行く。

思想はわれわれの後天的所得である。しかし感情はわれわれの先天的所得である。そこでわれわれは、われわれの思想の上には比較的容易に批判を加え得るのであるが、しかしわれわれの感情の上にはほとんど常に盲目である。感情の大部分は、ほとんど本能のものと見做されて、至上の権威をもつもののごとく取扱われる。また多くの思想は常にこの感情を基礎として築き上げられる。かくして感情は、自我の皮の中の、とかくにもっとも頑強なものとなりやすい。

感情もしくは本能は、生物本来の生きんとする意志から出発して、生存欲と生殖欲とに分れ、さらにこの二つがその周囲の事情によって千変万化して行く。われわれはこの千変万化の

行程の中に、われわれの理知と直覚とを十分に働かせなくてはならぬ。何となればその間に他人の無意識的もしくは意識的強制が多分に含まれているからである。

いわゆる文明の発達とともに、人類の社会は、利害のまったく相反する二階級に分れた。すなわち征服階級と被征服階級とに分れた。この事實は、人間本来の感情を、その各個人の利害のために発達させないで主として征服者の利害のために屈折させた。そして数万年間のこの屈折の歴史は、ついにわれわれをして今日われわれの所有するほとんどすべての感情を、人間本来のものと思わしめるまでに至った。

感情とはきわめて縁の近いわれわれの気質も、多くの場合に、この征服の事實によってはなだしく影響されている。もっと根本的に言えば、感情や気質の差別を生ぜしめるわれわれの生理状態そのものまでが、この征服の事實によって等しくはなだ影響されている。

かくしてわれわれは、われわれの生理状態から心理状態に至るすべての上に、われわれがわれわれ自身だと思っているすべての上に、さらに厳密な、ことに社会学的の、分析と解剖とを加えなくてはならぬ。そしていわゆる自我の皮を、自分そのものがゼロに帰するまで、一枚一

枚棄脱して行かなくてはならぬ。

棄脱は更生である。そしてその棄脱の頻繁なほど、酷烈なほど、それだけその更生された生命は、いよいよ真実に、いよいよ偉大に近づいて行く。